

## 文学館を訪ねて（寺田寅彦と牧野富太郎）

宮 英司

久しぶりに県立文学館を訪問した。目的は「らんまん」に関わる展示を見るため。今年「牧野効果」で、どこの博物館も牧野富太郎博士と自館の関連展示がなされている。寺田寅彦記念室のある文学館なら、きっと何らかの寺田博士と牧野博士の関連展示があるだろうと期待しての訪問だった。

はたして『寺田寅彦の自然観 ～寅彦から濱口喬夫へ～』と題するコーナーが記念室の入口に設置されているではないか。しかも、最初に眼に飛び込んで来る展示が、おそらく寺田博士愛用の植物図鑑。随筆でも読んだことのある図鑑の本物だ。説明には「牧野富太郎著『日本植物図鑑』1925（大正14）年／北隆館 寅彦によるメモのほか、遺族のものともみられる書き込みが散見される。」と。

そして書き込みは「星野 9 - VII - 26」と「星野 1935 - VII - 20」とある。想像してみると、左のメモが「昭和9年7月26日」、右のメモが「昭和10年7月20日」のものだろうか。（昭和10年までのメモは、おそらく寺田博士の直筆だろうと思われる。）日付の他には「花瓣」の特色などの観察メモ、「柱頭」という雌しべの一番先端部のことについての記述やイラストが描き込まれている。いずれも星野温泉に宿泊して観察し、…

パネルを紹介しておきたい。

寺田寅彦（1878～1935）と牧野富太郎（1862～1957）は、物理学と植物学と分野は違えど、同時代を生きた人です。

2人とも東京大学に在籍し、寅彦が植物に関してわからないところがあれば、気軽に質問する間柄でした。また、寺田寅彦記念館（旧寺田邸）の入り口には牧野富太郎筆の「寺田寅彦先生邸址」の碑があります。

寺田寅彦ミニ企画コーナーでは、NHKの朝の連続テレビ小説「らんまん」放送を記念し、牧野と同時代に生きた寅彦の自然観に焦点を当ててご紹介します。

さらに、寅彦の自然観を受け継いだと考えられる画家・濱口喬夫の絵をご紹介します。

\*

寅彦は、若い頃に「ホトトギス」の句を見て感動し、漱石の紹介で自身も寄稿していました。絵も好きで、当館には寅彦の絵が多く残されています。また、自然を描くことについても一家言持っていました。上野の二科展について嘆いているこんな文章があります。

花というものは植物の枝に偶然に気紛れにくっついている紙片や糸屑のようなものでは

決してない。吾々人間の浅墓な知恵などでは到底いつまでたっても究め尽くせないほど不思議な真言秘密の小宇宙なのである。それが、どうしてこうも情ない、紙細工のようなものにしか描き現わされないであろう。（「烏瓜の花と蛾」昭和7年）

この姿勢は、子規の「草々の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造花の秘密が段々分つて来るような気がする」という言葉とも響き合っています。

\* \* \*

寅彦の自然観を受け継いだと考えられる一人に、高知の画家濱口喬夫（1908～1995）がいます。喬夫の父は寅彦の二番目の妻寛子の兄、喬夫は寅彦の義理の甥になります。喬夫は寺田邸に出入りし、寅彦とバイオリンやチェロの合奏をし、絵画論を交わすなど、大きな感化を受けました。

寅彦日記には何度か喬夫の名が登場します。「浜口喬夫来り、デッサンを見せる」（昭和2年3月25日）という記述は、上の話を裏付けます。また、卒業後は寅彦が藤島武二や石井柏亭に声をかけ、喬夫の就職の面倒を見ていたことも日記から伺えます。（以下略）

実は、筆者は高知追手前高校の学生だった頃、濱口喬夫先生の美術の授業を受けた。定年間際であったと思う。日中戦争、インドシナ、ビルマに転戦したことは口にされなかったが、高齢を感じさせない毅然とした授業をされていたことをなつかしく思い出す。パネルでは、彼のお孫さんが映画監督として「ドライブ・マイ・カー」でアカデミー賞・国際長編映画賞を受賞した濱口竜介であることの紹介があり、次の世代へ受け継がれていく芸術面での可能性が示唆されてもいた。

\*

ここで名古屋の山田功様からのお手紙を紹介します。

「牧野富太郎に関わる展示が、名古屋地区でも行われております。その二つの紹介記事をお送りします。ご覧ください。

ひとつは、『牧野富太郎と岐阜薬科大学』、もうひとつは『牧野富太郎と伊藤圭介』です。少しでも関わり合いのある事柄は積極的に紹介しております。

『寺田寅彦と牧野富太郎』はうんと価値の高いテーマだと思います。新聞、テレビで大いに紹介していただくと良いと思います。」

\*

自由民権記念館では、企画展「牧野富太郎と土佐の自由民権」が開催中であった。入場したところで懐かしい文字に迎えられた。「寺田寅彦先生邸址」である。牧野博士が昭和27年に揮毫された書が展示されていた。（寺田寅彦記念館の正門に刻印されている。）

各地で広がってゆく牧野ブーム…。いつの日か、寺田ブームが静かに沸き起こっていくことを期待しつつ、朝ドラ署名に取り組んでいこうと思っている。